

編集委員が選んだ本

『黄金国家—東アジアと平安日本』

保立道久著／青木書店、2004年1月、3150円
東大寺の大仏は、全身が金色に輝いていた。この大仏の開眼会には新羅から700名もの参詣使節団が派遣されたが、一方では、東大寺の建立には百済系の豪族が関わっていたという。外来宗教である仏教と結びついた黄金こそが、先進文化や国際性の象徴であるとして、奈良・平安時代を「黄金国家」と規定し、東アジアとの関係を徹底的に分析することで、この時代の再構成を試みている。

『一目でわかる江戸時代』

竹内誠監修／小学館、2004年5月、2520円
授業ですぐ使える資料集である。江戸時代の政治・経済・生活・文化を地図やグラフ、図を使ってわかりやすく解説している。「人々の暮らし」「自然環境と人口」「生産と流通」「レジャーと文化」「幕藩体制と対外関係」の5章からなっており、各テーマ2ページ見開きで展開している。都市と農村における死亡年齢分布や各藩の財政状況を示す資料など、市販の資料集にはない独自の観点がいたるところに見られる。

『イスラーム主義とは何か』

大塚和夫著／岩波新書、2004年4月、735円
世界の人口の約1/4がイスラム教徒で、いずれそれは1/3になるといわれる。トルコのように西欧近代化を早くから進めてきた地域でさえ、イスラム政党が大きな支持を得て、政権を握っている。イスラム原理主義とかイスラム復興運動と呼ばれる、現代のイスラムの隆盛は何が原因なのか、18世紀以降の展開を中心に解説する。

『家計からみる日本経済』

橋本俊詔著／岩波新書、2004年1月、735円
マクロ経済や政府、企業と家計との関係といった、家計の経済行動の体系的な分析は、これまでなされてこなかったという。そして、経済学の主流では、個人は常に経済合理的に、効用を最大化する行動をなすものとされてきたが、そうではなく、あくまで現実の多くの国民の心理に立脚した書物は価値がある。なんとなく今まで感じてきたことが、数値的に立証され、それにもとづく政策提言がなされる。それは、小泉改革とずいぶんちがう。

『国際協力と平和を考える50話』

森英樹著／岩波ジュニア新書、2004年2月、819円
憲法を無視してひたすら日米同盟のために自衛隊を戦場に送る日本の現状を、どう捉えるのか。21世紀の世界と私たちはどのように連帯していくことが出来るのか、平和や安全を守り、憲法の理念を生かす国際協力のやり方など、日本の抱える課題を50話で語る。1993年の『これがPKOだ』の新版でもある。

『テキストブック 現代の人権〈第3版〉』

川人博著／日本評論社、2004年4月、2520円
これは授業に使える本。資料として好適な図版があり、抜粋して生徒に読ませられるくらい文章は平易。労働、環境、医療、刑事手続、報道、外国人、子ども、女性、消費者、国際社会という10の側面から、最近の事例にもとづき、人権について具体的に、第一線でバリバリ活動中の方々が執筆している。既知の方も多かるうが、今回最新の視点をとり入れ、数字も新しいものに変えて版を改めた。まだご存じでない方、ぜひ一読を。

『世界の戦場から ハイチ圧政を生き抜く人々』

佐藤文則著／岩波フォトドキュメンタリー、2003年10月、1890円
イラク戦争の影で、2004年2月、ハイチのアリステイド政権が崩壊した。「解放の神学」の神父アリステイドは1990年に大統領に選ばれ、西半球の最貧国ハイチの貧しい黒人の希望の星となったが、直後にクーデターで政権から排除された。2001年末に再選されたが、軍部との確執と、軍部を操る合州国による世界銀行援助金支給拒否で混乱が続く、反政府派による暴動でまた排除されてしまった。91年のクーデターから最近までの、ハイチの人々の絶望的な現状が白黒の写真で語られている。

『ブッシュの戦争株式会社』

テロとの戦いでぼろ儲けする悪い奴ら！』
ウィリアム・D・ハートウング著、杉浦茂樹・池村千秋・小林由香利訳／阪急コミュニケーションズ、2004年3月、1890円
「大量破壊兵器」「国際テロ組織支援」「イラクの民主化」などを大義として強行された米英軍らによるイラク戦争。だがそれらはすべて虚構であった。ブッシュ政権が軍需産業と癒着し、アメリカの産軍複合経済ぶりが極度に現れた結果であった。ブッシュ政権の人物たちが「テロ戦争」でいかにポロ儲けしているかを暴きながら、良心としてのアメリカを作り直すことを強く訴えている。

『茶色の朝』

物語・フランク パヴロフ、絵・ヴィンセント ギャロ、訳・藤本一勇、メッセージ・高橋哲哉／大月書店、2003年12月、1050円
国旗・国歌と定められただけの日の丸・君が代が、東京を中心に、思想信条・内心の自由を暴力的に蹂躪する道具となり、「黙って服従するかどうか」の上意下達システムづくりに利用されている。この本は、普通の生活を送っているつもりの人々が、やがて世の中すべてが「茶色」に染められていく過程を描いている。私たちに「思考停止をやめて考え続ける」必要性を静かに問うている。